古墳時代における文化の傳播(下)

小林 行雄

【梗概】わが國の古墳時代文化は畿内を中心とした地方にまず發生し、しかる後に關東や九州にも傳播したものであることはすでに認められている。その文化の傳播には時間を要するので、畿内における各文化相は、周緣地方では一二世紀ずつおこなれて行われている、といふのが従來の説であつた。しかし周緣で新しい時代に古い文化が行われた様に見えるのは、特殊な理由のある現象に限られることで、實際は周緣社會が一旦古墳の營造を必要とするようになる、周緣においても當時の畿内とは同じ文化相が傳えられていたのである。したがつて文化の傳播に時間がかゝるといふのは、與える側の壓力の蓄積と、受ける側の受入態勢の整備とが、ともに満たされてはじめて文化傳播の機構が發動するということ、兩者間の距離のみが決定的な要素ではないであらう。古墳時代の九州において、畿内文化が波及するまでは、直接大陸文化を取り入れることができなかつたのも、文化を受ける側の社會組織の未發達によるものである。

目次

一、序言

二、畿内文化の關東への傳播(以上前號)

三、畿内文化の九州への傳播

四、大陸文化の九州への傳播

三 畿内文化の九州への傳播

前方後圓墳の古い型式が前方部の低く細い形制のものであるという斷案は、日向方面に多い前方後圓墳の大部分がこの種の銚子塚型式——柄鏡型であり、しかも天孫降臨の

地であるという神話をめぐる地方民の期待に反して、副葬品から推されるそれらの古墳の實年代がさほど古くは遡らせ得ないところから、かえつてすべての前方部の狭長な古墳の年代を應神・仁徳兩陵によつて代表される最盛期以後に置こうとした、從來の學者の思はずしを訂正することになつたが、さりとはいえそれにつれて日向の古墳の實年代までは、にわかに變更を許されるべきものではなかつた。九州において古墳時代文化のもつとも早く移植せられた地方は、その様な神話の國である日向地方ではなく、かえつて仲哀紀などによりやく天皇遍歴の舞台として傳えられた、豊前から筑前の一帯であつた様である。

筑前國に遺品の多い彌生式時代における前漢乃至漢中期の中國製鏡鏝の副葬を除くと、古墳時代に入つてからの舶載鏡の發見例は、豊前一國において全九州の三割に達し、筑前・日向をしのいで第一位にあることは、すでに梅原博士の研究によつて明かにされたところである。しかもその大部分を占める二十面が、三角縁神獸鏡の型式であるといふのは、同式鏡の分布密度としては大和の二六面に次いで

古墳時代における文化の傳播(下) (小林)

全國第二位という注目すべき現象を呈しているのである。こういふ一事實からのみでも、豊前における古墳時代文化の開始が意外に古く、またその實體はかなり有力なものであつたことが想像されるのである。しかも實際の古墳について調べて見ると、豊前國京都郡苅田村南原石塚山古墳の如く、前方後圓墳の後圓部に長さ三間、幅三尺、高さ三尺と傳える長大な堅穴式石室があつて、いまは散佚したが四面の鏡と銅鏝その他を發見したという様な、畿内に見られる前期の古墳に比して、寸毫の遜色なきものを見出すことができるのである。

ところが一步筑前に進むと、福岡市姪濱五島山古墳の如く、副葬品においては鏡二面、硬玉製勾玉二個、銅鏝九個その他を有して、一應畿内の堅穴式石室を有する前期古墳のそれに近いものを存しながら、内部構造としては箱式棺を用い、外形また小規模なる山丘上の圓墳たるにすぎぬ程度のものを見るのみである。同じく九州では珍らしい銅鏝と、鏡・甲冑などを出した筑前國宗像郡田島村上高宮古墳においても、内部構造は副葬品用の小室を附設した箱式棺

六五

であつたことが報せられている。五島山古墳發見の銅鏃の型式は極めて特殊なものであるが、それに最も近い型式の銅鏃を出した山城國乙訓郡大枝村妙見山古墳の後圓部石室が、箱式棺と長持形石棺との中間型式ともいふべき一種の組合式石棺の前後に、割石積み副葬品用小室を附設している點で、上高宮古墳との關係が考えられるとすれば、これらの筑前諸圓墳の年代を四世紀後半以前に遡らせることは困難であらうと考ふる。

さらに粘土床を主體とし、三角縁神獸鏡三面を出した筑前國筑紫郡二日市町武藏古墳や、梅原博士が後藤碩田の拓本帳から探し出して、豊後國北海部郡神崎ツツキ山古墳の副葬品かと推定せられた二個の鍬形石の存在などを數え擧げて、それが五島山古墳などよりは幾分畿内文化の色彩が濃いとはいひ得ても、五島山古墳より古い時代に屬せしめねばならないという理由は見出しがたいであらう。たとえそれらの年代の決定は他日に譲るとしても、前方後圓墳の形制を有し、内部構造や副葬品の量質においても、畿内の古墳と同格にある程の、眞に畿内文化そのものといえる

様な古墳が筑前その他の地方にあらわれることになつたのは、やはり五世紀に入つてからのことであつたのである。しかもこの場合にも前方後圓墳の外形のみは、畿内に比して古い型の殘存期が永かつたことは、すでに森貞次郎氏が「畿内前期様式の墳丘が北九州に行はれたのは、畿内古墳時代の盛期に當る」という言葉で指摘された通りである。

そこで北九州において前記の諸墳以外の前方後圓墳で明確に五世紀の營造にかゝるものと斷じうるのはどれを指すかと問われるならば、自分はまず第一に筑後國浮羽郡千年村若宮月の岡古墳を挙げたいと思ふ。月の岡古墳は前方部の低く狭い前方後圓墳であつて、後圓部に割石積みの大規模な堅穴式石室があり、その内部にさらに組合式長持形石棺を安置した内部構造をもつてゐる。この種の長持形石棺の行われた年代については、すでに梅原末治博士の考察があつて、仁徳陵の前方部にあるもの、允恭陵と推定せられる河内國南河内郡津堂城山古墳の後圓部より發見せられたもの、繼體陵に比定せられる攝津國三島郡芥川村今城塚古墳の陪塚たる、岡本村前塚にあつたものなどの諸例を通じ

て、五世紀初頭より六世紀初頭に至る間に、畿内において博く使用せられたものであることが結論されている。しかも月の岡古墳の場合の様に、この長持形石棺が堅穴式石室による完全な被覆を伴つて用いられている例は、仁徳陵前方部や津堂城山古墳の如く、むしろ長持形石棺としては前半期に當る五世紀中葉までの諸例に共通するところであるというのが、梅原博士の考察であつた。

しかし、月の岡古墳の墳丘の外形が畿内の五世紀の形制に従わず、古い傳統の永續を示している様に、内部構造においても北九州では畿内よりも傳統の殘存が永かつた場合を考える必要はないかという、疑問を抱く人がないとは限らないであろう。ところが幸にして月の岡古墳と仁徳陵前方部埋葬¹⁰との兩者には、全く共通した特殊な一副葬品があつて、その様な懸念の不必要なことを物語つていたのである。この遺品こそはすなわち金銅裝眉庇付冑にほかならない。月の岡古墳の遺品は同地の若宮神社に藏するところであり、仁徳陵の眉庇付冑は再び埋納されていまその實物を見ることはできないが、和泉國泉南郡淡輪村西小山陵古墳

から發見された類品によつて、ほゞその實際を推知しうるであろう。

堅穴式石室と長持形石棺と金銅裝眉庇付冑という三種のメルクマールの合致から出發して、こゝでははらく九州からはなれて考えて見たいことがある。それはいま問題に上つた眉庇付冑の年代についてである。

眉庇付冑には月の岡古墳發見例の様な金銅裝の精巧華麗な種類と、鐵製で前者に比べると眉庇の透文などの簡略化せられた種類とがある。さらに鐵製冑の頂部のみに鍍金した、越前國吉田郡吉野村石船山古墳發見例の様な一群もあるが、いまはその細別を設けずに置くことにしたい。いずれにしても日本以外からの出土例としては、朝鮮の釜山附近から發見されたと傳える一例があるのみであつて、分布の點からいえば日本製品と考えたいところであるが、まず金銅裝の精巧な品が行われたとする私見が誤つていなければ、その形状とよい透文刻文の手法といい、また鍍金の技術といい、すべてわが國における突然の發案とは考えがたいものである。はたして金銅裝の眉庇付冑が大陸からの輸

入品であつたとしても、その分布は大陸に近い九州のみでなく、また當時の文化の中心地であつた畿内にもたらされたことは當然としても、遠く關東地方にも傳えられて、上總國君津郡清川村祇園古墳から、これまたわが國では稀例に屬する金銅製掛甲小札と伴出していることであるし、これに國産の可能性の強い鐵製品を加えると、その分布は一應萬遍なく東北地方を除いた國内の各地域に及んでいて、ある時期を代表する遺物と認めることができると思われるのである。

しかし、眉庇付冑の分布がかくの如く全國的であるとしても、それが月の岡古墳や仁徳陵の例の様に長持形石棺の副葬品として發見せられた場合は他に全く見られない。長持形石棺自身が、東日本にはあまり行われなかつた棺の型式であるから、上總祇園古墳などの場合に同じ組み合わせが見られなかつたのは致し方がないとしても、眉庇付冑を出した古墳の内部構造は實に多種多様である。したがつて從來の學者がこれを掛甲と結びつけ、衝角付冑と短甲との組み合わせとの對比によつて兩種の武裝の併行を考え、そ

の年代を限定しなかつたのもやむを得ないことであつたといえよう。しかしながら、眉庇付冑を出した古墳の内部構造がすこぶる變化に富むということのみでは、決してそれから直ちにこの形式の冑の年代が長期にわたることにはならないのであつて、そこに檢討を要する問題が残されていたわけである。議論を進めるために必要な程度で簡単に私見を述べて見よう。

眉庇付冑が堅穴式石室から發見された例としては、和泉西小山陵古墳と河内南河内郡黒山村黒姬山古墳とがある。堅穴式石室は古墳の内部構造としては最も古くから行われたものであるが、西小山陵古墳のそれは割石積みとはいうが長さ十一尺、幅二尺三四寸と報せられていて、前期の長大な堅穴式石室に比べると長さが半分以下にすぎない差異がある。黒姬山古墳の石室も同様な規模のものであるが、この場合にはそれが遺骸埋葬のための室でなく、副葬品のみを收容するためのものであることに理由が求められるかも知れない。しかし、ここでは室壁が普通の割石積みでなく丸石積みになつているのは、堅穴式石室としてはやゝ新

厩庇付冑出土古墳一覽

内部構造	古墳	滑石製品	短甲	掛	長頸	馬具	金冠	耳飾	陶質土器
箱式棺	上總祇園	○	○	○	○	○	○	○	○
"	上野鳥山		○						
粘土床	日向淨土寺山		○						
礫床	大和圓照寺		○						
堅穴式土壙	播磨 龜山		○	×	○	○	○	○	
堅穴式石室	和泉西小山陵	○	○	○	○	○	○	○	
"	河内黒姫山		○						
"	若狹 西塚		○						
長持形石棺	和泉仁徳陵		○						
"	筑後月の岡		○						
舟形石棺	越前石船山		○						
横穴式石室	肥後繁根木		○	×					
"	肥前今屋敷		○						
地下式横穴	日向六野原八號	○							
"	日向六野原十號		○						

しい時期のものに類例を見ることができ、まさに前方部の幅廣く發達した墳丘の外形にふさわしいものである。

古墳時代における文化の傳播(下)(小林)

凝灰岩質の自然の丘頂に、岩盤を掘り凹めて堅穴式石室様の壙を作つた、播磨國加西郡在田村笹倉龜山古墳の堅穴式土壙は、長さ十五尺、幅二尺四五寸あつて、板石を並べて上部を蔽つてゐることは堅穴式石室と同様である。壙の長さが十分に長くないことを以て新しさを感じるといえれば、高い丘頂に位置する古墳の立地が古さを想わすといわれそうである。しかし極端な自然の材料の利用によつて石室の構築が簡略化された様に、古墳の立地もまた自然の山形を活用するための特殊な計劃によるものであらうといふことは容易に理解できるはずである。

仁徳陵や月の岡古墳の幅の廣い堅穴式石室に入れられた長持形石棺については説明を要すまい。越前石船山古墳の舟形石棺は、後期に盛行した家形石棺に先行する石棺の型式として、長持形石棺と並行しうるものである。石棺としてはもつとも簡単な構造である箱式棺については、それがどの時期にも用いられたことを指摘する以外に、構造上からはその年代を限定することはできないが、同様に割竹形木棺を用いた際の粘土床その他の遺存物は、構造が簡單で

あるという理由で古い年代を與えるべきものでなく、本來木棺の被覆であつた堅穴式石室の省略された葬法であることは、すでに繰り返して説いたことである。

日向國東諸縣郡八代村六野原の眉庇付冑を出した二個の地下式横穴⁽¹⁴⁾のうち、第十號墳はその直上に圓墳があつて地下式横穴の方が先に存在したと考えられる事實が注意されているし、第八號墳においても、遺骸を置く部分には「封土墳の粘土槨に使つたのと同じき粘氣の多い白い精良の粘土」を敷いてあつたという。従來地下式横穴の年代はかなり新しいものと想像されていたが、これによつて割竹形木棺の使用に伴う粘土床を内部構造とする古墳のなお行われている時代に、すでにこの種の葬法が発生していたことが明かになつたのである。

眉庇付冑の用いられた時代にすでに地下式横穴が行われている以上、横穴式石室の存在は當然のことと考えられるが、肥後國玉名郡彌富村繁根木古墳の横穴式石室⁽¹⁵⁾は奥行七尺五寸、幅六尺二寸の主室と、奥行三尺、幅三尺七寸の前室とからなり、扁平な板石を小口積みにした穹窿狀の構造

をもち、主室内に板石の槨壁をめぐらした、この地方には多く見受ける形式のものであるという。肥前國東松浦郡鏡村今屋敷四方塚古墳⁽¹⁶⁾の石室はそれと異り、主室の奥に刳拔式の石棺身を殘しているが、この古墳から發見された眉庇付冑は普通の小札を鋲留にして型式でなく、横刃板を用いた特殊なものであり、末永雅雄博士も注意されている⁽⁸⁾様に、一種の退化形式であろうと考えられるものであるから、それが古墳の内部構造としては新しい型の横穴式石室から發見されたことも、一應了解せられるわけである。

これを要するに、眉庇付冑を出した古墳の内部構造は前期に遡るほど古い實例を見ず、後期に下げるほど新しい事實も少く、丁度その中間の時期の特色をもつていことが知られるのであつて、これによつて自分は眉庇付冑が古墳時代の中期の、限られた期間の遺物であることを提唱したいと思ふのである。しかし、なお以上の論述に、かゝる目的のために斷定を急いだ傾向がなくはないかと危ぶむ人があるかと思われるので、さらに伴出品について若干の説明と證明とを加えよう。

まず最初に注意を喚起して置きたいのは、眉庇付冑が銅鏃や碧玉製腕飾の類と伴出した古墳が一例もないということである。さういふ點からいえば、竪穴式石室に入れた長持形石棺を内部構造とし、銅鏃・車輪石・巴形銅器などを副葬した河内津堂城山古墳などは、これを允恭陵に推定することは差支えないとしても、眉庇付冑の行われた仁徳陵前方部埋葬以後の時代の古墳とすることは新たな疑問が感ぜられるのであるが、これについてはなお後で述べよう。

石製模造品がまだ使用を絶つていないことは、上野國太田市鳥山亀山古墳⁽¹⁷⁾において滑石製の刀子二十一個、鎌三個、斧頭二個などを伴出した事實によつて知られるが、それが石製模造品が後期まで残存した形迹のある上野のことであるといわれるならば、和泉西小山陵古墳から扁平な滑石製勾玉が十六個以上発見されていることを挙げればよいであろう。

眉庇付冑を着けた場合の甲の形式が、一般に想像されている様な掛甲ではなく、短甲であることが極めて多いことは事實であるが、その短甲には月の岡古墳や大和國添上郡

古墳時代における文化の傳播(下)(小林)

帯解村山村圓照寺墓山第一號古墳⁽¹⁸⁾などの様に、三角板革綴・三角板鉄留・横剣板鉄留などの各種の型式を同時に保有する場合もあるが、概して革綴のものは例が少く、さういう意味では日向國東臼杵郡吉野村大貫淨土寺山古墳⁽¹⁹⁾や河内國南河内郡錦郡村避病舍横古墳⁽⁸⁾から発見された、横剣板革綴短甲は注目に値するものである。短甲が革綴から鉄留に移行したということは原則的な變化であつて、一定の時期を以て前後に分割しうるものではないが、眉庇付冑の使用はどちらかといえば鉄留の短甲の多くなりつゝあつた時代に屬することがいえる様である。

わが國における掛甲の初現の時期は未だ確認されていないが、私はそれを中期に求めることができると考えている。和泉西小山陵古墳や大和圓照寺古墳において発見された數百枚の小札は、それぞれ一領の掛甲の副葬を考ふるべきものであり、上總祇園古墳の數種の金銅小札⁽⁸⁾が掛甲一領を構成するに足ることも、また多言を要さないところであつて、こゝでははじめて金銅製掛甲と金銅製眉庇付冑との本來の組み合わせを考へることが可能なるわけである。

しかし、だからといつて播磨龜山古墳の場合の様な、たとえ地方民の發掘にかゝるために散佚したものが多くという理由があるにしても、少量の小札からでは挂甲の存在を考へることは困難であつて、これは梅原博士が推定された様に、短甲の草摺などの一部に推定すべきものである。いずれにしてもこの小札の存在は、龜山古墳がすでにわが國に挂甲の手法が傳えられてから後のものであることを明示しているわけである。

播磨龜山古墳の年代の上限を限定するに役立つ遺物としては、いま一つ長頸式鐵鏃の存在を擧げるべきであろう。眉庇付冑と長頸式鐵鏃との伴出は、日向淨土寺山古墳、日向六野原古墳、和泉西小山陵古墳、大和圓照寺古墳、上野鳥山古墳及び肥前今屋敷古墳において認められる。この種の鐵鏃の型式は奈良時代まで連続して用いられているところから、これのある程度新しい時代のものとする通説に對しては、「古式の古墳から出土することも少なくない」という末永博士の警告があるが、實際には以上の様な中期の古墳に至つてようやく現われるもので、前期の古墳から發

見された例は管見に存しない。

筑後月の岡古墳、大和圓照寺古墳、日向六野原第十號古墳及び、若狭國遠敷郡瓜生村西塚古墳⁽²¹⁾では眉庇付冑と馬具とが伴出している。わが國の古墳における馬具の副葬は、すでに應神陵陪塚丸山古墳の如き古例を存するから、伴出の事實そのものには不思議はないが、しかもその實例のお寡少である點に、挂甲が騎馬戰用の甲として發達したものであるという推論にもかゝわらず、わが國では馬具の副葬がまだ一般的でなかつた中期の性格が示されているといえよう。陶質土器の伴出例がほとんどなく、わずかに上總祇園など一二を擧げうるにすぎないことも、同じ意味で注意されることである。

金銅製冠帽や金製耳飾などの、南鮮との密接な關係の考へられる一連の遺品は、わが國では丁度眉庇付冑と交替に、中期末・後期初頭に普及したのであるが、金銅冠は越前石船山古墳⁽¹⁸⁾において、耳飾は若狭西塚古墳においてそれぞれ眉庇付冑と共伴し、肥前今屋敷古墳では三者がまた同時に副葬せられている事實⁽¹⁶⁾があつて、眉庇付冑の終末期を

著しく限定するに役立つのである。

註①梅原末治博士「本邦古墳出土の同范鏡に就いての一二の考察」(『史林』第三十卷第三號、昭和二十年)。

②烏田寅次郎「石塚山の古墳」(『福岡縣史蹟名勝天然紀念物調査報告書』第一輯、大正十四年)。

③烏田寅次郎「五島山の石棺」(『同上』)。

④烏田寅次郎「石器と土器・古墳と副葬品」(『福岡縣史蹟名勝天然紀念物調査報告書』第十三輯、昭和十四年)。

⑤烏田寅次郎「異例の古墳」(『福岡縣史蹟名勝天然紀念物調査報告書』第十輯、昭和十年)。

⑥梅原末治博士「豊後北海部郡に於ける二三の古墳」(『歴史と地理』第十二卷第三號、大正十二年)。

⑦森貞次郎「北九州古墳の編年的考察」(『豫報』)(『西日本史學』第一號、昭和十四年)。

⑧末永雅雄博士「日本上代の甲冑」(昭和九年)。

⑨梅原末治博士「久津川古墳研究」(大正九年)。

⑩平林悅治「仁徳天皇陵に埋まる金色の甲冑」(『考古學』第十卷第七號、昭和十四年)。

⑪末永雅雄博士「淡輪村西小山古墳と其の遺物」(『大阪府史蹟名

勝天然紀念物調査報告』第三輯、昭和七年)。

⑫梅原末治博士「在田村龜山古墳と其の遺物」(『兵庫縣史蹟名勝天然紀念物調査報告』第十四輯、昭和十年)。

⑬高橋健自博士「越前國吉田郡石船山の古墳及び發見遺物」(『考古界』第七篇第八號、明治四一年)。

⑭瀬之口傳九郎「六野原古墳調査報告」(『宮崎縣史蹟名勝天然紀念物調査報告』第十三輯、昭和十九年)。

⑮梅原末治博士・古賀徳義・下林繁夫「熊本縣下に發掘せられたる主要なる古墳の調査(第一回)」(『熊本縣史蹟名勝天然紀念物調査報告』第二冊、大正十四年)。

⑯後藤守一「九州北部に於ける古墳の二三(其の一)」(『考古學雜誌』第十二卷第四號、大正十年)。

⑰尾崎喜左雄「太田市鳥山古墳について」(『日本考古學協會第三回總會研究發表、昭和十四年』)。

⑱佐藤小吉・末永雅雄博士「圓照寺墓山第一號古墳調査」(『奈良縣史蹟名勝天然紀念物調査報告』第十一冊、昭和五年)。

⑲鳥居龍藏博士「上代の日向延岡」(昭和十年)。

⑳末永雅雄博士「日本上代の武器」(昭和十六年)。

㉑上田三平「若狭及び越前に於ける古代遺跡」(『福井縣史蹟勝地

四 大陸文化の九州への傳播

筑後月の岡古墳の年代の推定に關聯して、まず決めて置かねばならない眉庇付冑の所屬時期の問題のために、いままでも多くの紙敷を費したが、かくて月の岡古墳を以て古墳時代中期における畿内文化の傳播の確實な例證と見ることは、もはや疑問の余地がないであらう。

さて次の問題は、この様な畿内文化の傳播を受け容れるとともに、大陸文化をも直接享受しやすい位置にある北九州においては、そこにいかなる文化複合の現象が見られるであらうかということである。かつて濱田耕作博士は、筑後・肥後方面に見出される古墳の表飾としての石人石馬の類を以て、大陸の石人石獸を寫し傳えたものであり、それが埴輪土偶の源流をなしたときえ考えられて、九州を経て大陸文化の傳播と、その畿内あるいは東國への波及をも論證しようと試みられたことがあつたが、今日ではそれも

過去の話になつてしまつた。石人自身の發達が、豊後國北海部郡下北都留村熊崎白塚古墳の短甲形の様な、甲冑を表わしたのから人體の表現に移行した過程が推察され、そこに器財埴輪からの變化が考えられる上に、筑後國八女郡下廣川村一條石人山古墳において、すでに石人は人物埴輪や動物埴輪と共存して發見されているからである。北九州における石人石馬の發生を説明するためには、畿内文化の傳播と、これを受容した地域における加工しやすい阿蘇熔岩の存在とを以てすればほとんど十分であつて、あえて大陸からの刺激を待つ必要はないかと思われる。

裝飾古墳の九州における特殊な分布も、また大陸の墓制との關聯において取上げられることの多い現象であるが、裝飾古墳の名稱で總括される彫刻または彩画を有する古墳の中には、あまりにも時期を異にし成立の事情を異する各種のものが同一視されている嫌がある。少くとも朝鮮における高句麗時代や百濟時代の横穴式石室に見られる壁面の彩画との關係を考慮することのできるものは、九州では石棺や槨壁に彫刻された直弧文裝飾よりは、やゝ遅れて出現

した墓制に属している。しかも、石棺や柳壁に直弧文を適用するといふ發案は九州ではじめて考え出されたことであつたとしても、嚴重な構圖の約束を有する直弧文自身は、畿内文化のうちに育てられたものといわねばならないから、九州において裝飾古墳を發生せしめた原因は、これまた石人石馬と事情を同じくし、時期を等しくして、畿内文化の傳播とそれを受容した地域の特殊現象として一應理解することができるのである。

たゞし、こゝで注意を逸してはならないことは、これらの直弧文を彫刻した石棺といえども、筑後石人山古墳その他の實例が示す様に、一種の横穴式石室の中に收められているばかりなく、それ自身が横穴式石棺の形制をとつてゐることである。同様に直弧文を刻した柳壁が横穴式石室の構造の一部をなすものであることはいふまでもない。したがつて、九州における裝飾古墳の發生の背後には、たとえその決定的要因ではなかつたにせよ、すでに大陸系墓制の影響が潜在することも見逃すことのできない事實である。

古墳時代における文化の傳播(下) (小林)

横穴式石室が單に語の上で堅穴式石室と對比せられるにすぎない程度の、構造上の相異のみを有するにとどまるものでなく、死者と生者とが相對しうる空間の成立によつて、それに伴う儀禮の變化と器物の變化とを生じたこと、内部構造は完全に封土の中に埋没せられて、墳丘の前面が一方的に生者を迎えていた前方後圓墳において、横穴式石室の採用は墳丘の側面への石室の開口を導き、こゝに新しい墳墓の正面を現出して、前方後圓墳の意義を喪失させるに至つたこと、それらはすでに幾度か繰り返えされて述べられたことである。しかりとすれば、横穴式石室の發生は、單なる葬法の一つの傳來にとどまらず、大きな影響力をもつた文化傳播の標徴として取り上げるに足るのである。畿内文化と對比せられる大陸文化の傳播を、九州において實證しようとするには、まさに横穴式石室こそは格恰の文化現象といふべきであらう。

しかし、すでに彩画を有する裝飾古墳としての横穴式石室が、九州において最初に發生した型式ではないことを指摘した自分の立場からいへば、從來の所説ほど簡單には、

横穴式石室の九州への直接の渡來を考へることができないのである。はたして畿内と九州とにおいて、横穴式石室の初現の時期にどれほどの差異が見出されるであろうかというところを、こゝに改めて検討する必要があることとなる。

九州における横穴式石室の普及の時期については、それが横穴式石棺を生じたという前提をも認める意味において、兩者が一つの古墳の内部構造として共存する、筑後石人山古墳よりも以前に考えられるべきであろう。しかし、前方後圓形の墳丘上に、石人及び各種の形象埴輪を有することは知られているが、副葬品の不明な石人山古墳の年代は、それのみからは推定が困難である。たゞ同じ種類の横穴式石棺を直接後圓部に埋めた、肥後國玉名郡江田町船山古墳と、相近いものであろうという推定が許されるならば、金銅製冠帽・金銅製沓・金製耳飾などの、特色ある一群の遺物を、陶質土器などと共に副葬していた船山古墳の年代は、ほぼ五世紀の後半に比定されるであろう。

この古墳から発見された一口の環頭大刀の銀象嵌による

銘文を、「治天下瓊宮、ミヅ齒大王世云々」と判讀せられた福山敏男博士の研究を認めるならば、これが四三八年を中心とする前後五年間に在位せられた反正天皇時代の製品に限定せられることになり、古墳の年代も上限を決定せられるわけである。また全国的に大部分は横穴式石室から発見せられ、さきの肩庇付冑とは交替して行われたと認められる金銀使用の一連の装身具は、朝鮮ではたとえ五世紀初頭にすでに行われていたとしても、わが國では五六世紀の交に年代を求むべきであつて、ひとり江田船山古墳のみを五世紀前半に遡らせることは不可能であるからである。

船山古墳の年代から推定して、筑後石人山古墳もまた五世紀後半にありとすれば、この種の横穴式石室から肩庇付冑を発見した肥後繁根木古墳の事實も、また合理的に解釋されることにならう。しかし、石人山古墳の年代が五世紀後半に推されるとしても、それは九州において横穴式石室の普及が、新たな横穴式石棺を生み出すに至つた時期である。たとえ長持形石棺、あるいは組合式家形石棺から横穴式家形石棺への變化が、一側邊に開口部を設けるにすぎな

いという理由で、きわめて容易に生起し得たと考えても、なおそれは九州における横穴式石室初現の時期の決定とはいえないであらう。

それでは他により古い年代を與えうる横穴式石室の實例が、九州のどこかに見出されるであらうか。現在までに知られた古墳としては、たゞ一つ、筑前國糸島郡周船寺村丸隈山古墳(丸)の不十分な資料を擧げうるにすぎないのではないかと思われる。丸隈山古墳の後圓部石室の發見は寛永年間のことといい、羨道あるいは前室などの構造はいま破壊されて知る由もないが、扁平な割石を小口積みにした石室内に、砂岩質の加工板材を組み合わせて、二個の遺骸を並置するための棺を設備している状態と、「上は大石を覆ひ口も又石を以て是をふさぐ」という『筑前續風土記』の文によつて、それが本來横穴式石室としての構造をもつていたことが推されるのである。

さて丸隈山古墳の年代の推定に役立つのは、副葬品中の二面の仿製鏡よりも、二個の巴形銅器であらう。この種の圓錐狀座四脚式の巴形銅器が、堅穴式石室を内部構造とす

古墳時代における文化の傳播(下)(小林)

る前期の古墳から發見されるばかりでなく、その源流は彌生式時代の甕棺墓にまで遡りうることは周知の事實であるが、いま問題とすべきものはむしろその下限である。そこで思い合わされるのは、備中國都窪郡加茂村新庄下千足古墳(古)において、直弧文を刻した櫛壁を有し、割石を小口積みにした九州系の横穴式石室の外部から、粘土床を内部構造とする別個の埋葬の副葬品として、十二個の巴形銅器が發見されている事實である。後者の埋置が横穴式石室の入口に近接していることから考えて、當然石室築造後の二次的な埋葬であることが認められるとすれば、九州における横穴式石室の普及が遠くこの地方にその分派を生じた後に、なお巴形銅器が使用されていたことが知られるであらう。しかし、この事實は丸隈山古墳において横穴式石室から巴形銅器が發見されたという所傳の確實性を保證するにとどまつて、その年代の決定にはなお十分の發言をもたない感がある。

さらに畿内に眼を轉じると、堅穴式石室内に長持形石棺を収めた河内津堂城山古墳(古)の副葬品中に、また巴形銅器が

七七

見出されるのである。この古墳が正しくは允恭陵に比定せらるべきものであるという一部學者の所説が容れられるならば、その年代は五世紀中葉に求められることになる。したがつて問題の丸隈山古墳の年代もまた、巴形銅器が唯一の手懸りとされる限り、少くとも五世紀中葉まで下げうることは認められなければならない。

そこで新な關心の的となるのは、同じく五世紀中葉頃に考えられた丸隈山古墳と月の岡古墳との前後關係である。津堂城山古墳が允恭陵であるとしても、その棺の特殊な彫刻といい、銅鏃・車輪石などの副葬品といい、これを仁徳陵前方部の眉庇付冑を伴つた埋葬より新しい時代に置くことには疑問の余地がある。仁徳天皇の崩年は『宋書』によつて四二〇年代に考えられるというが、それはまだ發見されていらない後圓部の埋葬の年代であつて、後に前方部を利用して追加せられた長持形石棺には、むしろ五世紀中葉以後の年代を興えるべきではなからうか。かくてかりに畿内における津堂城山古墳と仁徳陵前方部埋葬との對比が、九州において丸隈山古墳と月の岡古墳との關係として再現さ

れているとしても、丸隈山古墳もまた墳丘自體は畿内文化の流を受けた前方後圓墳の形制に従つてゐる事實を思えば、これらの二古墳の年代にはなほだしい距りをつけがたいことを當然であつて、それが北九州一帯における畿内文化の強力な傳播の時期を明示しているものと考えられるのである。

それでは畿内における横穴式石室の初現はいつの頃に求められるであらうか。それについては近江國高島郡水尾村鴨稻荷山古墳の如きをもつて、今日知られている比較的古い實例に推せうとする私見と、濱田・梅原兩博士がこの古墳を五六世紀の間にあると論ぜられた年代觀⁽⁸⁾とを援用して、その時期を五世紀末以後に求めたいと思う。しかりとすれば、こゝに九州と畿内とは、横穴式石室の採用に約半世紀の開きが生じたことになるわけであり、大陸の新しい墓制がまず九州に受け容れられた後、畿内に傳播したという所説が認められるのである。

しかし、繰り返して注意をうながして置きたいことは、九州の有力者がこの様な大陸の文化を攝取するために

は、ただ大陸に近いといふ地理的條件のほかに、新しい大陸文化を受容するに足るだけの基礎的文化的形成が必要であつたと思われることと、かゝる文化的地盤の準備は、まづ畿内文化の傳播をまつて用意せられたこと、しかも九州一帯に對する畿内文化の普及に先行して、豊前方面に對する畿内文化の移植がまず認められることなどである。九州における豊前の役割りは、また關東においては武藏によつて果されていたことを想起すべきであらう。

ある文化の發展過程における飛躍的變化の動因を、外部からの文化の傳播によつて説こうとする者は、やゝもすればいかなる地理的・民族的障害をも超越した、たゞ高い文化地帯から低い文化地帯への、文化そのものの移動傳播を單純に考へる傾向がないとはいへなかつた。しかし、日本の様な狭い島國のうちにおいても、生前の權威を死後にも持續させることに大きな意義をもつた、死者のための壯大な墳墓の營造といふ、各社會集團の權力者のみが主として變革の恩恵に浴しうる様な文化現象の傳播には、他に先んじてそれを必要とする社會段階に入つた大和國家の政治力

・軍事力の一層の蓄積と、新しい社會構成を組織するための地方權力の凝集とをまたずしては、傳播の機構は發動しなかつたのである。古墳時代畿内文化がようやく關東・九州の各地各地に現われるまでに、畿内における一二世紀にわたる經營を必要とした⁽⁹⁾というのは、距離のみが傳播をさまたげ、おくらせたものではなかつた。なるほど大和國家の權力の伸張は、距離に比例して近隣から次第に遠隔の地域に及んだであらう。しかし、政治力・軍事力の波及が距離に比例し、したがつてそれに隨伴した文化の傳播が、同じく距離にはゞまれて時間を要した様に見えるとしても、一旦同一の文化圏が形成されると、以後の文化の傳播にはその間に距離を意識させる様な時間的遲延が認められない事實が、そのしからざることを立證するであらう。

また大陸の文化がいかに高度の段階のものであり、その文化圏への距離がいかに近接していても、改めて社會構造が、これを受容することを可能にするまでは、朝鮮と九州との間にすら直接の文化の傳播が認められない時期があり、しかもその期間には大陸とは距離の遠い畿内がその文

化の享受者の地位を占めていたことも事實である。そうして九州に入つた大陸の文化が、横穴式石室の場合の様に畿内で行われるまでに若干の時間を要したのは、これもまた距離の問題でなく、畿内における古い文化の強い傳統の存在によるものと理解すべきであろう。備中千足古墳の飛び離れた一例の存在を見ても知られる様に、九州に入つた横穴式石室は、ほとんど時を置かずして遠くへだたつた土地にその姿を現わすこともできたのであり、しかもまた、そこではすぐには後繼者を育てることもできなかつたというのも、この様に考へてはじめて説明のつく現象である。

かくの如く文化の傳播には、與える側と受ける側との社會段階の異同によつて、これを容易ならしめる場合と困難ならしめる場合とがあることは、傳播によつて文化の變革を説く者の特に留意すべきことであろう。そこに文化變革の問題もまた生ずるのであるが、本稿ではことさらにそれにはふれないで置きたい。

註①濱田耕作博士「支那の土偶と日本の埴輪」『藝文』第二年第一號、明治四四年。

②梅原末治博士「筑後國一條石神山古墳の調査報告」『史學』第九卷第二號、昭和五年。

③梅原末治博士「玉名郡江田船山古墳調査報告」『熊本縣史蹟名勝天然記念物調査報告』第一冊、大正十一年。

④福山敏男博士「江田發掘大刀及び隅田八幡神社鏡の製作年代について」『考古學雜誌』第二四卷第一號、昭和九年。

⑤島田寅次郎「丸隈山古墳」『福岡縣史蹟名勝天然記念物調査報告』第一輯、大正十四年。

⑥和田千吉「備中國都窪郡新庄下古墳」『考古學雜誌』第九卷第十一號、大正八年。

⑦大道弘雄「河内國小山村發見の大石棺」『考古學雜誌』第二卷第九號、明治四五年。

⑧濱田耕作・梅原末治博士「近江國高島郡水尾村鴨の古墳」『京都帝國大學文學部考古學研究報告』第八冊、大正十二年。

⑨したがつて、三世紀に倭種諸國を代表する様な勢力をもち、直接大陸と交通したと傳へられる邪馬台國は、その文化が古墳時代に屬するものである限り、その位置を九州に求めることは不可能である。かつ魏代の鏡百面を輸入した文化を古墳時代以外に求めることもできなからう。

（昭和二五年三月稿）